

朝の爽やかな陽光がブラインドの隙間を抜けて入り、うっすらと舞う埃を浮き上がらせる静かな事務室で、俺は持ち主の許可を得て、深い青の布の中に潜り込む。持ち主にして上司、俺の恋人である斉藤ゆかりのスカートだ。タイツに包まれたほっそりとして可愛らしい両足を広げ、飾り気の無い白いショーツに手をかける。椅子に腰掛けた彼女が少しだけ腰を浮かせてくれ、俺は彼女の一番大事な部分を守っている布を一気に引き下ろす。ぴっちり閉じた可愛らしい二本の筋に、俺はためらいもなく指を添え、少し開いてから、中から覗くサーモンピンクの肉にむしゃぶりついた。うっすら生えていた和毛のような恥毛を剃り落とした無毛の丘の触り心地を楽しみながら、俺は彼女の喘ぎ声と、塩辛い蜜を引き出すために、下品に音を鳴らしながら割れ目を舐めしゃぶる。

「ふう、うふう……」

苦しげな、何かを堪えるような喘ぎ声。どろりとした愛液が俺の口周りに溢れ、俺はますます下品な音を立て、それを吸い込む。押し拵げていた太腿がびくりびくりと上下する。俺は駄目押しに、少しだけ顔を出した彼女の快樂の芽を皮ごと口に含み、吸い上げる。

「あ、ああ……!」

太腿が俺の頭を挟み、ねっとり白濁した愛液が奥から溢れ出てきた。スカートの中にいる俺からはもちろん表情が見えないが、イッたらしい。ぽってりとした肉の襞を軽く啜え、味を惜しむようにしゃぶってから、俺は大人用の玩具を一つ取り出す。一つは無線操作のピンクローター、愛液が滴る下の口に飲み込ませる。もう一つはアナルビーズ。椅子まで滴った愛液をまぶしながら、俺はゆかりさんの色素も薄いお尻のすぼまりに一つ目を宛がう。

「息を吐きながら、力を抜いてください。一つずつ数えますからね」

「なあ、そっちは……う、入……て、くる……」

「一つ、二つ……」

何日か前から少しずつ拡張していた甲斐があつてか、ゆかりさんのそこは抵抗しつつもビーズを一つずつ飲み込んでいく。十個のビーズが収まり、すぼまりに触れた金具が体内の動きを伝えるように小さく揺れた。

「残さず食べれましたね。じゃあ、着替えましょう」

絶頂に達した直後だからか、体内に二つもある異物感のせいか、いつも以上に億劫そうにゆかりさんが立ち上がり、後ろを向いて着替え始める。普段の厭世的にも思えるけだるさではなく、快楽によるけだるさの雰囲気。これから俺とゆかりさんは街にデートに出かけるのだ。

\*\*\*

どうしてこんなことになったのかは、先日のゆかりさんの誕生日まで遡る。ゆかりさんのしたいことを目一杯したい、と張り切った結果、日本のあちこちにラーメンを食べる三泊四日の旅行に付き合うことになったのだ。ラーメンは確かに美味かったが、俺はラーメン屋だけを渡り歩く旅行に終盤はうんざりしてしまった。それを察したのだろう、ゆかりさんが埋め合わせに俺の誕生日には俺の希望を叶えてくれることになったのだ。そして俺は、ゆかりさんの目を見てこう言ったのだ。

「創立記念日にゆかりさんと一日デート。俺の言うことを何でも聞いて欲しい」

もちろん、ゆかりさんは渋ったが、約束を破るという後ろめたさに負けたのか、危ないことだけはしないという拒否権をつけた上で認めてくれた。そして、今日という訳だ。ゆかりさんと俺がそういう関係になってからそれなりに日が経つが、俺は一週間、ゆかりさんのアナルの拡張や愛撫、下着や服を見繕うといったスキンシップだけに留め、禁欲につとめた。今しがたの愛撫で俺も興奮したし、頼めば椅子に座ったままゆかりさんの体内に押し入ることも出来る。だが、それでは外遊びの勢いが削がれてしまう。一度目は外で、と決めていたのだ。

\*\*\*

着替え終わったゆかりさんがおずおずとこちらを向く。

「お前……これはちよつと……」

もちろん、ゆかりさん自慢の艶やかなストレートの黒髪は普段のとおりだ。二本のリボンで肩の根本から吊るされるような、肩が大胆に出たノースリーブのシャツ。もちろんノーブラで、うつつすらと控え目に膨らんだ胸の先端が浮いて見える。スカートもかなり際どいミニスカートだ。黒いニーソックスとスカートの間の白く形のいい、綺麗な太腿が眩しい。確かに、子供ならば着せるのをためらう服だが、ゆかりさんは子供ではない。

「似合ってますよ。すごく綺麗です。行きましょう」

これはお世辞ではなく、心の底から思う。ゆかりさんはそういうことを聞きたいわけではないという戸惑いが半分以上、褒められて悪い気はしない気持ちが残りという表情を浮かべる。俺はゆかりさんの躊躇を押し流すように、手を取った。